石童丸の家の名寶騒動

苅萱桑門筑紫轢

『守宮酒の段』あら筋

娘の使節に

キモリをのませ

情愛に絡ませ寶を守る

筑紫の大名加藤左衛門繁氏は酒杯に散る櫻花に無情を感じ、假睡のうちに、E妻と側室とが互に嫉炎を燃やす夢のもつれを見て發心し、高野の山深くのがれる、時に豐後の大領大内義弘は、勅と偽り加藤家に傳はる寶石夜光珠を強奪する

＝加藤家＝ の執權監物太郎は二十歳を過ぎた處女でなければ手を觸れることも出來ないからと、事を構へて斷つたが、大内家では、これに相當する多々羅新洞左衛門の娘夕しでを使者として夜光珠を受取りに來る そこで監物太郎は一計を案じ、美男の弟女之助を迎へに出しむもり酒をすゝめて夕しでの心を蕩かしてしまふ

＝夕しで＝ は偽りの黒玉を渡されるが、も早や何ともいふことの出來ぬ身となつてしまつたので夕しでは自害して申譯をする新洞は怒つて監物に詰めよつて見たが、たつた一人の娘が一生に一度の男と知つては心も折れ、名玉も受取らずに立ち歸るといふ筋である

と夫太朝古
郎次友の紘

廿八年振りに上演された珍らしい人形淨るり『守宮酒の段』

今夜七時四十五分　大阪文樂座より中繼

四ツ橋々畔、菖蒲に風薫る六月の文樂座中繼――題は石童丸の哀話で知られた「刈萱桑門筑紫轢」守宮酒の段である

▽……これに續く「高野山の段」は歌舞伎を初め、その他の音曲で、あまりに有名であるが「守宮酒の段」は、今日では歌舞伎にも殆んど上演されず、淨るりとしても現存の師匠中、誰一人知る者もないほどの廢曲に近い珍らしい曲である、先代津太夫がよく語ったが、文樂座の手摺にかかったのは明治卅九年、攝津大掾が演じたのを最後として今日におよんでゐる

▽……今度の上演は、鶴澤友次郎が秘藏してゐる五行本の朱を辿って復活させたもので、實に廿八年振りに語られる淨るりである、語り手は中が文樂の中堅文字太夫、切が將來の紋下をもつて目せられる古靱太夫、物語の内容はともかくとして、相當注目に値する淨るりである

文樂人形舞台
のスケッチ

（齋藤清二郎畫伯筆）